必要な支援がなければ みんなでつくり、制度へと昇華させる

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン

代表理事
柴崎　由美子さん
しばさき　ゆみこ

東北事務局スタッフ
武田　和恵さん
たけだ　かずえ

東京を拠点に活動する NPO 法人エイブル・アート・ジャパン（以下、AAJ）は、1994 年に前身となる「日本障害者芸術文化協会」を設立し、アートや人間の可能性を再発見する活動『エイブル・アート・ムーブメント』を進め、2000 年に現在の「エイブル・アート・ジャパン」に名称を変更。2010 年に東京にギャラリーとショップ、アート・スタジオを設置し、2011 年 4 月に NPO 法人化しています。

これまで障害のある人や生きにくさを抱える人が表現をする場や仕組みを作り、作品を発表・販売する環境を整えてきました。東日本大震災の発生を機に、沿岸部の障害福祉作業所の支援を皮切りに宮城県に拠点を構え、東北の障害者芸術支援の環境をつくるための活動を続けています。

山元町への支援をきっかけに東北へ

2011 年、東日本大震災の発災後、被災地域に所在する関係性のあった障害福祉作業所や現地の中間支援組織に連絡を取ると、作業所が被災し稼働できず助けがほしいという声が聞こえてきました。被災地の状況を知り、まず AAJ と複数の NPO が支援に入ったのは山元町にある「工房地球村」でした。

工房地球村は主に精神障害を抱える利用者のための通所授産施設です。震災から 2 か月を経過した頃には、利用者が施設へ戻ってきましたが、肝心の仕事がありませんでした。震災前の看板商品であった地元の特産品を活かしたいちごジャムは、いちごの生産が震災で壊滅的な打撃を受け、製品化できなくなりました。また、震災後はそれ以外の清掃などの仕事も激減しました。

そこで AAJ と複数の NPO が関わり、アートによる「生きる力の取り戻し」と「仕事の復興」を目的とした「いちごものがたりプロジェクト」が 2011 年 10 月から始まりました。ここから生まれたのが、「いちごものがたり」ブランドです。利用者が描いたいちごやりんごのイラストを活用したオリジナルてぬぐいが全国で 5,000 枚を売り上げる大ヒット商品となったほか、従来地球村で作っていた入浴剤などの商品もパッケージを新たに同じテイストでデザインし、商品の魅力を引き出しました。

当初、AAJ の工房地球村への支援は、東京や関西から通いながらのものでしたが、2012 年 5 月には武田さんが宮城県内の常駐スタッフとして入職。2013 年春には仙台市に事務所を構えたことで、以降 AAJ 東北事務局として、宮城県や福島県の被災地の福祉作業所へ、より機動的な支援が可能となりました。

専門性を活かした中間支援

山元町での支援と平行して、仙台市、南三陸町、多賀城市などの障害福祉作業所でも同様にアートを活かした商品開発支援を実施してきました。「NOZOMI PAPER」（南三陸町、のぞみ福祉作業所）、「tam tam dot」（仙台市、多夢多夢舎中山工房）はそこから生まれた新たなブランドシリーズの例。「NOZOMI PAPER」はのぞみ福祉作業所が震災後に支援者から提供された紙すき器具を使った手すき再生紙商品ブランド、「tam tam dot」は米袋を再利用したポーチやバッグなどのクラフトグッズをベースとしたブランドです。

これらの商品・ブランド開発にあたって共通しているのは、それぞれの作業所が抱える課題を聞き出し、その解決の方向性をはっきりさせ、実践にあたってはデザイナーなど必要なリソースと結びつけ、かつ商品開発後も引き続きサポートを行っている、ということです。

▲いちごものがたりプロジェクトから生まれた和てぬぐい

▲2015 年 1 月に開催した「はじめまして SOUP 展」にて

こうした震災後の支援を通じ、AAJ は宮城県内の障害者芸術支援における自分たちの役割を強く実感してきました。これまでも宮城県や東北には障害のある人々の芸術活動や、芸術活動を通じた障害者支援の取組はありましたが、障害者支援を行う作業所や授産施設へ、障害者芸術に関する専門性を持って間接的な支援を行う組織はありませんでした。他県では行政窓口にも障害者芸術支援の窓口が設置されている例があるにもかかわらず、宮城県ではそもそも障害者芸術自体が注目されているとは言えない状況だったのです。「そこから少しずつ変えていきたい」と武田さんは言います。

行政や専門家と連携し、常設機関を設置

2014 年、AAJ は宮城県からの推薦を得て厚生労働省が進める「障害者の芸術活動支援モデル事業」（平成 29 年度からは障害者芸術文化活動普及支援事業）に手を挙げ、採択されました。これは採択地域に「障害者芸術活動支援センター」を設置する事業で、センターは相談機能、支援人材の人材育成機能、関係者間のネットワーキング機能などを備えることになります。

こうして設置された「障害者芸術活動支援センター@宮城」には「Sign」（表現活動による存在の「しるし」）、「Open」（障害のある人たちの表現を社会に「ひらく」）、「Upset」（障害というバリアを「ひっくりかえす」）、「Planet」（惑星のように個人や活動に「よりそう」）の頭文字を取って、「SOUP」という愛称がつけられました。SOUP の活動としては、常設機関として福祉作業所などからの相談対応、障害者芸術支援の担い手向けに著作権など作品の権利保護に関する研修などを実施し、県内の障害者芸術支援の底上げを図るとともに、栗原市、石巻市、山元町などで展示会を行い、障害者芸術の価値、存在を地域へ伝える役割も担ってきました。

また、行政の障害福祉担当課、大学などとともに県内の障害者芸術活動の実態を調査し、作家の発掘とデータベース化も行ってきています。

「今そこにないなら、みんなでつくろう」が市民の立場からのスタンスだと AAJ 代表理事の柴崎さんは SOUP 立ち上げ時に語っています。まさに SOUP の設置によって、宮城県の障害者芸術を発展させていく上で AAJ が必要と考えていた支援が、一歩実現に近づいたと言えます。

障害者芸術の学校を構想中

宮城県に必要と考えた障害者芸術に関する中間支援機能は、厚生労働省のモデル事業として設置された SOUP によって、いったん担保されることになりました。

しかし、AAJ は障害のある人たちが学校を卒業すると表現活動を学び、実践する場がなくなってしまうことに着目し、芸術文化を学び、表現活動が可能な場としての「SOUP 芸術の学校（仮）」を作れないかと考えています。

今はまだ構想段階ですが、まだ存在しない新たな支援の形として、今度は自分たちが場を運営するチャレンジです。また、これまで民間の助成金、行政の補助金で賄ってきた東北事務局の財源を自ら生み出すチャレンジでもあります。

宮城県内の障害者芸術を次の段階へ進めるため、ハードルは低くはありませんが、『今そこにないなら、みんなでつくろう』の精神で乗り切ろうとしています。

特定非営利活動法人
エイブル・アート・ジャパン

< 問合せ先 >
〒983-0851 宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡 5 番地
みやぎ NPO プラザ内 No.16
（上記住所は 2018 年 8 月末までの予定）
TEL▶070-5328-4208
E-mail▶ soup@ableart.org
URL▶ http://soup.ableart.org/